

## No.2 犬による咬傷

事例	年齢：0歳 4か月 性：男	
傷害の種類	外陰部咬傷	
原因対象物	ミニチュアダックスフンド（メス2歳，体長60cm，体重6kg，母の実家の室内で飼育していた．狂犬病ワクチンは接種済であった．）	
臨床診断名	右精巣粉砕	
発生状況	発生場所	母の実家の居間．双胎の弟と昼寝をしていた．
	周囲の人・状況	事故の発生した時間の前後15分間程は居間には誰もいなかった．家の中には母と祖母がいたが，別の部屋にいた．
	発生時刻	1月16日 午後2時00分頃
	発生時の詳しい様子と経緯	母の実家の居間の床に敷いた布団で双胎の弟といっしょに昼寝をしていたため，母は部屋を離れた．その15分後に祖母が様子を見に行ったところ，患児は顔面蒼白で，オムツには犬に咬まれた跡があり，外陰部から出血していた．午後2時16分，当院救命救急センターへ救急搬入となった．
治療経過と予後	来院時に右陰囊創内に挫滅組織を認め，亀頭部には切創もみられた．破傷風トキソイド1A投与後，直ちに右精巣摘出術が施行された．出血量は116gで，術中に濃厚赤血球を1単位輸血した．術後の経過は良好で，26日後に退院した．	

### 【こどもの生活環境改善委員会からのコメント】

1. 動物が食べている時や動物同士が争っている時に手を出すと咬まれることが多い．
2. 動物が嫌がることをして咬まれる子どもが多いが，この例は4か月児であり，子どもの動作に誘発されたものではない．
3. 患部の写真をみると陰部に湿疹などはなく，犬はオムツの尿の臭いに反応したと思われる．
4. 室内犬を飼っている家庭が増加しており，乳児と動物が同じ平面で接触できる状況は短時間でも避けるよう指導する必要がある．